兼松講堂のものがたり

ベヒシュタインピアノ、原智恵子 そして兼松講堂

時は太平洋戦争の敗色が漂い始めた頃…。開戦当初の戦意高揚のスローガン「撃ちてし止まん」もいつしか「一億玉砕」に変わり、昭和18年、学生の徴兵猶予が停止され学徒出陣が始まった。翌、昭和19年（1944）10月、この兼松講堂において本学学生の出征学徒壮行会が行なわれた。

2、3の教授の壮行の辞に続いて演壇に立たれた山口茂教授の力強い第一声は「諸君、どうか死なないでくれ…。」学生たちは一瞬我が耳を疑い、場内は水を打ったような静けさになったという。戦場で国のために死ぬことが日本男子の名誉とされ、生きて帰るなどとは口が裂けても言えなかった時代である。

「一億玉砕なぞと、死にたい奴は死なせたらよい。しかし諸君には生きていてもらわなければ困る。戦争に勝っても負けても、国家が直ちに必要とするのは諸君なのだ…。」

＊

この壮行会でピアノ演奏をしたのが、日本人ピアニストの草分けとしてショパンコンクール（1937）に初めて入賞し「特別聴衆賞」も得て、世界から「東洋の奇跡」と称えられた国際的な名ピアニスト・原智恵子（1914~2001）だった。

彼女は13歳でパリに渡り、ラザール・レヴィ、コルトー、ルービンシュタインなどに師事、コンセルヴァトアール（パリ音楽院）を首席で卒業しピアニストとしてのキャリアを着実に歩み始めたちょうどその矢先、戦争のため帰国を余儀なくされていた。

帰国後は、最も著名な演奏家の一人として、戦時色濃厚な中、芸術を求めて止まない人々の期待に応えて演奏を重ね、表現の自由が極度に制限された中でも、芸術としての本来持つ自由な精神を決して失わなかった意志の人でもあった。

実は、当初、彼女は出征壮行会なら出演しないと固辞したと伝えられている。ところが、当時日本に3台しかないといわれていたドイツ製ベヒシュタインピアノがあると聞いて、まさかと驚き、「そのピアノを弾かせていただくために…」ということで演奏が実現した。

＊

山口茂教授の壮行の辞に引きつづいて原智恵子がピアノを演奏…。そして演奏が終ると自ら進んで演壇に立ち挨拶した。

「本日は思いもよらぬ素晴らしい会にお招きをいただき感激しております。ただいまは戦（いくさ）に向かう若者の情熱を讃えたショパンのポロネーズを演奏いたしました。行く日があれば必ず帰る日もあるはずです。ご凱旋のときにはぜひともまたお招きをいただきたい。みなさま、おすこやかに…」

この美貌のピアニストは両手を前に固く結び、両眼からとめどもなく溢れ出る涙は頬を伝って流れ落ちていた。

＊

この壮行会の翌日にはもう憲兵が来校し、教授の話を聞いた学生に内容を聞きまわっていたという。

この翌月11月3日、兼松講堂では創立記念を兼ねた文化厚生会（＝文化祭）が行なわれ、ふたたび原智恵子が演奏している。

そしてこの日を境に、ベヒシュタインピアノは片付けられて座席も取り外され、工作機械類が憲兵と軍人に先導されて次々とトラックで運び込まれ、兼松講堂は軍需工場となった。いよいよわが国も、そして「東京産業大学」と改称させられていた東京商科大学（現一橋大学）兼松講堂も、終戦までの厳しい道のりを歩むことになる…。

＊

そして幾星霜…。2005年7月18日、70数年ぶりに大改修された兼松講堂での第1回「くにたち兼松講堂　音楽の森コンサート」“ピアノ四重奏の夕べ――上田京・恵谷真紀子とウィーン・フィルの仲間たち”を聴かれた往年の卒業生Eさんは、当日のアンケートにこう書いておられる。

「学徒出陣の思い出が残る兼松講堂が、今、こうして地元の方々に愛されているのは 本当に嬉しい…。」　（了）

〔注〕この稿は、一橋大学同窓会誌「如水会々報」に寄稿した田中秀一さん（1949年専門部卒、故人）の鮮烈な思い出や田澤義彦さん（1950年学部卒）の証言などをまとめた、一橋大学広報誌『HQ』Vol.3（2004年春号）「記憶の中の兼松講堂――激動の昭和史をみつめてきた講堂2」によっています。

◆1853年にベルリンに設立されたベヒシュタイン社のピアノはリストやドビュッシー、名ピアニストのシュナーベルも愛用したという。兼松講堂にあったベヒシュタインのグランドピアノは1923年製。戦前・戦後の一時期まで原智恵子、安川加壽子などわが国の代表的ピアニストがたびたび来演。
以後半世紀、ひっそりと大学の片隅で眠っていたが、2003年、如水会（一橋大学の同窓会組織）によって修復、みごとに蘇った。現在は如水会館におかれ、「如水サロンコンサート」などで使用されている。

◆原智恵子については、石川康子『原智恵子　伝説のピアニスト』（ベスト新書：KKベストセラーズ）がお薦め。この本がきっかけの一つとなり、日本人離れした往年の名演が最近相次いでCDで復刻されている。

◆「戦没学友の碑」のこと
山口教授や原智恵子さんの願いも空しく、学問の志半ばで学徒出陣により戦場に散った多くの学友の鎮魂のため、如水会員やご遺族等の手で、平成12～3年一橋大学佐野書院の一隅に「戦没学友の碑」・「812柱の記名碑」を除幕し大学へ寄贈。平成13年「一橋いしぶみの会」が発足、年3回の碑前慰霊会を行なっている。

2006.5.14 第4回くにたち兼松講堂　音楽の森コンサート
『吉野直子とアンサンブル・ウィーン＝ベルリン』プログラムより抜粋